令和６年度第２回さいたま市図書館協議会会議録

開催日時　　令和６年１１月２２日（金）　１０時００分～１２時００分

開催場所　　さいたま市立中央図書館　イベントルーム

出 席 者　　（委員　※敬称略）
山田和子、加藤路子、富田敏弘、二宮奈緒美、石川敬史、宮田洋輔、入井将文、柏宏之
（事務局）
杉本中央図書館長、内田中央図書館副館長、宮野管理課長、
中島資料サービス課長、野村北浦和図書館長、望月東浦和図書館長、
馬渕大宮図書館長、大木大宮西部図書館長、長谷川春野図書館長、
溝上与野図書館長、大橋岩槻図書館長、石井桜図書館長、玉木北図書館長、
村山武蔵浦和図書館長

欠 席 者　　（委員　※敬称略）
佐藤理恵、関根公一、茂木千春、木和田美佐、関田晃

公開・非公開の別　　公開

傍聴人の数　　１人

次第

令和６年度第２回さいたま市図書館協議会

日時：令和６年１１月２２日（金）１０時００分～
会場：さいたま市中央図書館　イベントルーム

次　　第

１　開　会

２　議題及び報告事項
（１）さいたま市図書館協議会について
（２）さいたま市図書館の概要について

３　その他

４　閉　会

＜配布資料＞
（１）　第１２期図書館協議会委員名簿　・・・（資料№１）
（２）　令和６年度さいたま市図書館名簿　・・・（資料№２）
（３）　さいたま市図書館協議会　座席表　・・・（資料№３）
（４）　第１２期さいたま市図書館協議会の提言について①　・・・（資料№４）
（５）　第１２期さいたま市図書館協議会の提言について②　・・・（資料№５）
（６）　第１２期さいたま市図書館協議会の提言作成スケジュール　・・・（資料№６）

＜事前送付済み資料＞
（１）　令和６年度（令和５年度事業対象）図書館評価報告書について

１　開会

事務局から資料の確認を行った後、進行を石川委員長に委ねる。
本会議について公開とすることを確認後、傍聴希望者を確認。傍聴人１名。

２　議題及び報告事項
（１）　令和６年度（令和５年度事業対象）図書館評価報告書について

図書館評価専門部会長である春野図書館長から、事前配布資料を用いて説明を行った。
併せて現在さいたま市図書館ビジョン第二期実施計画の後期について検討・作成を行っており、目標や指標の候補や今期の指標についての意見があれば参考とさせて頂きたいことを説明した。

質問・意見・協議等

石川委員長　図書館評価報告書は、今回の協議会で承認されたら公開されていくということでよいか

春野図書館長　そのとおり

石川委員長　評価の基準としては数値目標となってしまうが、定性的なものが重要だと思う。それをいかに数値で表すのかが難しく事務局も苦心していると思うが、次年度に向けて目標や指標について少し変えた方が良いのではないか

山田委員　目標と指標に関して、レファレンス件数が少なくなってしまっている。ネットなどを使って自分で調べることが多くなり、わざわざ図書館のレファレンスサービスを利用することが少なくなっているのが実情だと思う。レファレンス件数というだけで指標にするとこれからどんどん数字が下がっていくのではないか

春野図書館長　現状の目標値に達していないことは前回も説明したとおり。スマートフォン等で自分で気楽に情報が入手できる世の中になっているが、難度の高いもの、確固たる活字で必要なときやバックボーンが必要な時に図書館が頼られているように見受けられる。指標そのものを変えるか取り方を変えるようにしていきたい

二宮委員　リファレンス受付件数は市内全館の数字か

春野図書館長　そのとおり

二宮委員　各館ごとの数字も計上されていて報告書に乗せていないだけだと思うが、各館ごとの取り組みとして中央図書館よりも多い等の比較はできるのか。比較して何かしら地域性などがあった場合に、各館それぞれの良いところを取り入れれば実績が上がるのではないかと思うが、レファレンスというのが来るのを待っているのか何でも聞いてくださいと呼びかけをしているのか知りたい

春野図書館長　各館ごとの件数は図書館要覧 60 ページに記載してある。メールレファレンスについては中央図書館で一括で受けていたものをそれぞれの拠点図書館で

も受けるようにした。数値的なものはわからないが、それぞれの区の歴史や地名についてはそれぞれの館に寄せられているという実感がある。

レファレンスへの姿勢については、利用者から見て図書館の職員も忙しそうだったり、カウンターで知らない人にこんなことを聞いてよいかと躊躇うこともあるとは思うが、職員側も何を聞かれるのだろうと身構えているところもあるので、レファレンスカウンターだけでなくフロアで配架中や本をお探しの際などに敷居が低くなるような姿勢で臨みたい。そのために研修を行っているところである。

資料サービス課長　利用者の方がなかなか声をかけづらいという話があった。カウンターに直接足を運ぶのは抵抗がある利用者もいると思う。試行的に中央図書館ではフロアの中で巡回して作業している職員に気軽に聞けるように図書ナビと題してブックトラックにポスターを貼るなどして取り組んでいる。効果があれば各館にも広めていきたいと考えている。

石川委員長　二宮委員からも指摘があったが、待っているだけではなく利用者とのコミュニケーションというか、学びたいという想いを後押しするような施策、気軽に声を掛けられる環境づくりがレファレンスサービスの基盤になるのではないか。

メールレファレンスはさいたま市内だけでなく、市外からも質問があると思うが、統計は取られているか

春野図書館長　フォームに住所記載欄がないので住所についての統計は取れていない。県外からの問い合わせの多くはさいたま市や埼玉県域に関することもしくはそこに所蔵されている地域資料に関することが多いという実感がある

石川委員長　やはり歴史的なものや地誌的なもの、この地域に特化した質問が県外や市外からの問い合わせには多いのだろう。メールは気軽に利用者の方が質問できるが、時間のかかる質問が多くやってくると職員の分担など体制が課題になるのかと思う。自身も地域の歴史を調査しているので、他の都道府県のいろんな公共図書館にも質問をするが、メールで聞くのが一番手軽だが、込み入った質問だと恐縮だと思いながら質問をしていたため、職員側の感覚について質問した。

入井委員　一般の来館者視点では、レファレンスという言葉自体が難しいと思うので、先ほどご案内のあった気軽に何でも相談くださいというポスターを貼って巡回するなどして何でも相談できる雰囲気を作っていくのは一つの手だと思う。また、レファレンスに代わる誰でもわかる言葉で表現するというのも大事だと思う。利用者の方にどうやったら喜んでもらえるか、使いやすくなっていけるかの視点を持つことが大事だ

来館者の年代層は把握しているのか。わかれば打つ手も変わってくるのではないか。アンケートにぜひ年代も入れていただきたい

春野図書館長　レファレンスを訳すと調査相談や参考調査というかえってわかりにくいも

のになる。資料サービス課に調査相談係があるが、市の職員でさえ何をやっているかわからない。図書館によってはレファレンスカウンターという名称をそうだんカウンター、あんないカウンターとひらがなで書いてあるところもあるが、案内やアナウンス等も含めて検討していく必要がある。

来館者については、ゲートを通る際に自動的に計測している。入館料の徴収ももぎりもしていないので、来館者の年代層はわからない。貸出については可能である。

資料サービス課長　図書館要覧には掲載していないが、貸出については年代については把握しており、令和４年度の利用については館別に各館長に提供しており、利用者への効果的なアプローチの方法はないかといったところで生かせないか検討している

入井委員　年代層別に取られるのであれば、健常者と障害者の数やデイジー図書やＬＬブックといったものがどれくらいが妥当かといった参考にもなるし、外国人の割合などがわかればもっと充実した対応ができるのではないか

資料サービス課長　今後そういった細かいデータについてもできる限り確認していきたい。バリアフリーのサービスについては、登録申し込みの制度があり、福祉の関連部署の案内にバリアフリーサービスの案内を載せてもらったりしており、これからもＰＲについて検討していく必要がある

石川委員長　利用者の年代層はとても重要で、どういった方たちが館としての図書館を利用しているのか人として固定で見ていく。仮に６歳の方であれば 10 年後は 16 歳、子どもの頃に絵本を読んだり本を読んだりした経験というのは、高校生になったり大人になったりしたときにまた戻っていく。そういった長いサイクルで図書館の利用について捉えて、今の時点と同時に何年か前、何年か後を見ながら時間軸の中で利用者層を把握していくのは非常に重要である。年代層について可能な限り把握してほしい

宮田委員　先ほどメールレファレンスについて少し触れていたが、ネットでのサービスに関する評価が項目としてないのではないか

結果が最終的にＡＢＣＤとまとめられて、Ｂが多くなってしまうのは、図書館が努力していないように見えて損なのではないか。徐々に増加する形で目標値が設定されていて、様々な制約の中で努力した結果であることが伝わるような評価の見せ方が大事なのではないか

春野図書館長　ＩＣＴに関しては指標として前期は選んでいないが、「知りたいにこたえる」の「市民の課題解決に役立てられる資料の提供」の取り組みの方向性には挙げている。ＩＣＴについては、ＤＸ化や生成ＡＩ等時代に即した、図書館として数値化できるものを検討していきたい

評価については、例えば防災訓練については 25 館で 50 回行っているが、これを増やすことは現実的でないし、先ほどのレファレンスでも触れたとおり社会情勢が変わってきている中でより適正かつある程度達成が難しい評価指標

を検討したい

中央図書館長　データに基づいてどのように手を打つか、サービス水準を上げるかに興味関心があるのはもっともである。指標自体をすぐに変更することはできないが、評価の説明の中でなぜこの数字になったのか、それを踏まえてどの分野に後押しが必要なのか、その結果次年度以降にどのような結果が得られたのかという評価の仕方をした方がより説得性があり良いと考えている。後期の計画の際にはそれがわかりやすい指標になるようにし、毎年図書館が進化しているという部分を見せていきたい。

25 館全体で１つの数字を出していることの是非については我々としてもあり、地域特性であるとか、その内容が正しいか、正しい表現として数字で現れているのか再度稟議を行い、さらに良いものを提示できるよう努力していく。

石川委員長　今回の報告書の評価の説明が、単年度について書かれていて、前年度どんな課題があって今年度どういう地点なのかがなかなか見えない。今後は継続性、積み上げというところも評価の観点として求められるのではないか

柏委員　読書が好きな子供の割合が小学校 97%、中学生 95%、高校生 93%というのは自身の肌感や世間一般で言われていることと全く逆の数字が出ているが、どのような数字の取り方をしているのか

資料サービス課長　このアンケートは、市立の小・中学校の全生徒と、市立高校の抽出された生徒に対して行っている。全生徒ではないが傾向は捉えられているはずである

春野図書館長　世間的には読書離れや本を読まないと言われているが、不読率ではなく読書が好きかどうかという問いであるため、このような結果になったのではないかと考えている

石川委員長　高校生は受験等があり、一番図書館の利用が少なくなる世代で、このような数字が出るというのは、信憑性、信頼性について問い直してみる必要があるのではないか

ただ一方で読書に関する色々な活動については、朝の活動やビブリオバトル、学校図書館への支援など、様々な行事を展開しているのでその成果が出ているというのも当然あると思う

春野図書館長　97%、95%、93%という数字は目標値に対する達成率で、高校生の目標値は 78%であるのでこれも決して低くはない

加藤副委員長　現場にいる人間の一人としては、学校の読み聞かせの時間はなくなった。図書館で毎週土曜日読み聞かせに行っているが子供が来ることはない。親が連れてきてくれる３，４歳の子供たちは来る。親が来たくて一生懸命聞いてくれるが、子供が自発的に来ることはほとんどない。最近は「子供は本が好き」と言えなくなってきている。チャレンジスクールも手伝っているが、余った時間に本を読もうと言うと、10 年くらい前は子供たちが喜んで本を取りに行っていたが、今は読まない。子供たちに聞くと家でも読まないと言う。読み聞かせに行ったところの母親達から話を聞いたところ、自分たちも読んでもらったこと

がないと言う。家庭で読んでもらう習慣がないので当然その子供たちも本を読む習慣がない。いろんな物語を読みたいと言ってくる子は最近ほとんどいない。図書館の数字も柏委員の肌感もどっちも正しいと思う。子供に本が好きか聞くと好きと答えるが、自分から手に取ってみようとしていないのが現状だと思う。小学生に図書館に行って何をするのか聞くと調べ学習だと答えた。中学生はもっと調べ学習のために行っていると聞く。これから先、本というものが子供たちにとってどのようなスタンスでいるのか心配している

石川委員長　本を読むという活動が、自分が大人になったときに子供たちに読書の楽しさというものを伝えていく。作品のすばらしさというものを作者と共に育んでいく。そういったことを図書館として後押しできるような仕掛けがあると良い

子供の読書活動への支援のところも今回の意見を踏まえて後期計画の評価に生かしていってほしい

石川委員長　評価のあり方を一旦総括しても良いのではないか。評価をすることを目的になってしまって、豊かな図書館活動を展開していくことに繋がっていない気がする。これまで積み重ねてきた評価を振り返ってみてほしい

春野図書館長　指摘のとおり評価が目的ではないが、実際評価疲れという言葉も聞かれる。現在のさいたま市図書館ビジョン第二期ができるまでの評価の総括を以前行ったが、一番多くて 50 項目を超えており、17 項目に絞った経緯がある

評価に掛かる労力なども視野に入れて、次期の図書館ビジョンとして見直しをしていく必要があると考えている

中央図書館長　図書館ビジョンに基づいた評価活動であるので、このビジョンに掲げた目標像をどこまで設計したかは、その評価活動がどれだけ貢献するかに繋がる。後期計画がこれから始まるが、一旦総括が必要で、それができないのであれば、次のビジョンでビジョンを中心にＰＤＣＡが回るようなスキームを作って評価を行っていくことが必要であると考えている

２　議題

（２）　第１２期さいたま市図書館協議会からの提言について

事務局より資料№.４から６を用いて説明を行った。

次に議論の参考のために各図書館長から各館の特徴的な取り組みについて説明を行った。（中央図書館については資料サービス課長から説明）

質問・意見・協議等

宮田委員　資料５に記載されている内容が基本的な方向性にあたる位置づけだという認識でよいか

管理課長　そのとおり

宮田委員　基本的な方向性であるならば、長く使うものになると思われるので、例えばＤＸという言葉は一過性のものなので普遍的な表現に言い換えた方が良い。また、資料５の６番の「本を届ける」という表現も、図書館としては本だけでな

くいろんな情報を届けるというニュアンスがあると良いと思う。解説として今使われている言葉があるならば良い

石川委員長　「本を届ける」という表現の言い換えでよくあるものに「図書館を届ける」というものがある。本を届けると同時に情報を届ける、いわゆる情報保障であったり、学んだり知ったりすることを保障するという社会基盤としての図書館といったもの。抽象的になってしまうがこのような表現はいかがか

入井委員　移動図書館はさいたま市ではどのように運用しているのか

大宮西部図書館長　移動図書館は大宮西部図書館が所管しており、車が１台、約 3000 冊を積んで市内 16 か所を２週間掛けて、図書館が近くになく図書館が使いにくい方がいると想定している地域を回っている。２週間に一度、長くても１時間程度であるため、極端に貸出数が多いということはないが、どこのステーションに行っても待っている方がいるやりがいのある仕事である。

入井委員　スーパーに行けない人のための移動スーパーというのが最近多く稼働していると思うが、図書館がそういう発想をするのはすごいと思った。図書館ができた当初は移動図書館が主体だったという歴史的な経緯もあるようだが、これからの高齢社会の中では大事な視点なのではないかと思う

石川委員長　図書館が受け身で市民を待っているのではなく、図書館自らが本とかの情報を必要としている方に対して出かけていくというのは、距離だけでなく、入院されている方や高齢者施設に入られている方など、利用したくても利用できない方へのアプローチの仕方もいろいろあるのではないかと思う

加藤副委員長　子供の時から本に親しんでいると大人になっても本を読むのだと信じている。期せずして移動図書館の話が出たが、10 数年前までは家の近くに移動図書館が来ていた。図書館が増えて必要がなくなって来なくなったが、年を取ってきたらまた欲しいという声が起きてきている。時代と逆行しているかもしれないが、そういうものも必要になってくるのではないかと思った

石川委員長　資料５の６番にあらゆる世代とあるが、図書館車がやってくると、高齢の方以外にも若い世代の方や子供たちなどもやってきて、世代を超えた場が作られていくということもあると思う

山田委員　各館の取り組みを聞いて本当に素晴らしいと思ったが、それを私たちが知らないというのが残念だ。

武蔵浦和図書館をよく利用している。入り口の前に別所沼や税関連など色々なパネルが出ているが、せっかく図書館の前なのだから、連携して関連する本を図書館でも紹介したらよいのではないか

武蔵浦和図書館長　館に帰って考えてみたい

管理課長　自分たちの住んでいる地域の情報が図書館に行けば何でもわかることが理想だと考えている。

石川委員長　図書館が先にあるのではなく、町の中、地域の中に図書館があり、地域の方、関連の団体の方、ボランティアの方などと一緒に図書館を作っていくというよ

うな敷居の低さ、サンダル履きで行けるような図書館ということを思った

富田委員　思った以上に各図書館の特色が出ていることが分かった。これをうまく広報していけば、様々な世代の方の利用動機や面白そうというのが伝わると思う。

ワンフレーズも今回わかりやすく、イメージしやすくなったのでこれを提言に盛り込めると良いと思った

二宮委員　図書館の在り方の８つの条項に図書館の積極的な思いがこもっていて良いと思った。石川委員長の言ったように敷居の低い、地域の住民とともに未来を拓くみたいな文言が入ると良いと思った

石川委員長　1970 年代に図書館ができたとき、市立図書館ではなく市民図書館という名前で、市民のための図書館という位置づけで建てられることがあった。そういう歴史的な源流、原点に立ち返ってみても良いアイデアがでてくるのではないか

柏委員　地域の情報発信基盤として活躍していると思うが、地域の格差を感じるところが少しある。中央区に住んでいるが、大宮区と浦和区に挟まれていて、大宮図書館はとても面白いことをされているとおもうが、中央区は華がない。都内からの移住者からは住みやすいとは言われるが、逆に言うと何もない。そういう方たちにも、この町はどのように構成されてきたか図書館に行ったらわかるような展示があったら面白いのではないかと思った

石川委員長　建物の図書館としては、徒歩圏内の図書館に行くことが多くなり、図書館の活動や新しさ、古さなど地域差が出てしまうので、各館の取り組みで他の館でも取り入れられるものがあると良い

司書に関して、本に対して詳しい、情報に対して詳しい司書だけでなく、学芸員や社会教育主事、絵本専門士など本に関わる資格を持っている方とも何か一緒にできるという展開も望まれるのではないか

３　その他

質問・意見・協議等

各委員　（特に質問、意見なし）

４　閉会